

第二日

公開セミナー

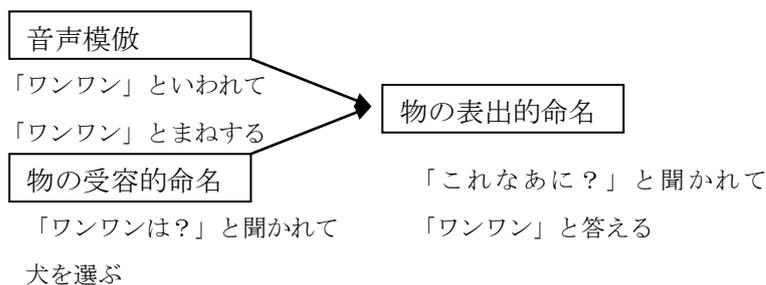
「自閉症児のためのABAホームセラピーーわが子のために親ができることー」

主催 NPO法人 つみきの会

2008年6月15日 名古屋

講師 藤坂龍司（つみきの会代表）

1. 言葉の引き出し方



(1) 音声模倣

言葉のない子から言葉を引き出すには、音声模倣から。

「あ」と言ったら「あ」、「ん」と言ったら「ん」と、言われたとおりにマネをする練習

<音声模倣の手順>

ステップ1：全ての発声を強化

子どもが自発的に何かを発声するたびに、おかしやだっこなどで強化する

1分間に5回程度の発声が見られるようになったら、次へ

ステップ2：大人の発声の直後の発声だけを強化

大人が例えば「あ」と言い、子どもがそれから5秒以内に何かの発声をしたら、たとえ似ていなくても強化する。5秒以降の発声はもはや強化しない。

ステップ3：大人の発声に似た発声のみ強化

大人が例えば「あ」と言い、子どもがそれに近い発声をしたときだけ強化する

ステップ4：大人の発声と同じ発声のみを強化

例えば「あ」に対して「あ」と返ってきたときだけ強化する

ステップ5：第二の音の形成

ステップ1～4と同じ手順で、二番目の音、例えば「ん」を形成し、強化する

指で唇をつまむなどして、プロンプトするとよい。

ステップ6：第一の音と第二の音の区別

第一の音をもう一度練習して、復活させた後、二つの音を数回ずつ交互に練習。切り替えが上手になったら、二つの音でランダムローテーションを行う。

<音の作り方：その1>

初期における音の形成法

①自然に出た音を拾う

日常生活でよく自発する音を、音声模倣に取り入れる

②シェイピング

少しでも近い音を強化し、徐々に目標に近づいていく

③口形模倣

口元を見せて、形をまねさせる

④手を使って（身体援助）

指を使って口を開けさせたり、逆につむらせたり

⑤逆エコー

子どもが発する音に逆に大人が合わせて後追いで発声する。うまくすればそれが強化子となり、子どもは大人の発声に自分から合わせてくるようになる（音のマッチングが強化子に）

<音の作り方：その2>

ある程度、音が増えてきてから

⑥「不意打ち」法

既存の音を、コントラストをつけてバラバラに模倣させ、音に対する感受性を高めてから、不意に新しい音を入れると、ポツと出ることがある。目指す音そのものがでなくても、別の新しい音ができることもある。

⑦いもづる法

同じ行（同じ子音）にどれか出ている音があれば、それを手がかりに、口の形の変化を強調するなどして別の音を引き出す。

「マ」が出ているとすると、「マ、マ、マ、ミ」で「ミ」を引き出す。

「マ」と「モ」が出ているとすると、「マ、モ、ミ」で「ミ」を引き出す。

⑧合成法

すでに出ている音を組み合わせることで新しい音を作れるときがある。

「ウ」＋「ア」→「ワ」 「イ」＋「ア」→「ヤ」 「ン」＋「ア」→「マ」

<音節、単語模倣>

単音が15くらい出てきたら、残りの単音を引き出す訓練を継続する一方で、すでに出ている音を2～3つつなげて、音節や単語を言わせる練習をする。

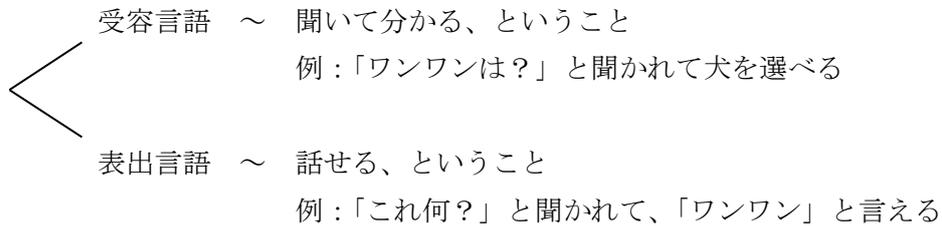
最初は、「マ・マ」のように同じ音の連続音や「マ・イ」のように子音＋母音など、比較的言いやすい組み合わせから。意味のあるなしにこだわらずに、いろんな組み合わせを練習させる。意味のある単語だけを練習していると、それを覚えてしまい、最初の音を言っただけで、その単語を言うようになるので、よくない。

例：「か」といっただけで、「かめ」と言ってしまう。

三音節になったら、組み合わせが膨大になるので、意味のある単語に限定するとよい。

(2) 物の受容的命名

<受容言語と表出言語>



<物の受容的命名の教え方>

テーブルに二つの物（例えば犬と車）を並べて、「ワンワン」と言ったら犬を、「ブーブー」と言ったら車を触れるようにする。

ステップ1：テーブルに犬だけを置く。「ワンワン」と言って、ただちに子どもの手を取って、犬に触らせる。次の試行からプロンプトをフェーディングし、最終的に「ワンワン」というだけで、子どもが自分から犬に触れるようになるまで練習する。

ステップ2：テーブルに犬と車を置く。「ワンワン」と言って、プロンプトし、犬に触らせる。徐々にプロンプトを減らす。プロンプトなしで犬に触れるようになったら、左右の位置を入替えて、同じことを練習する。途中で左右の位置を入替えても、10試行中9試行以上、犬に触れるようになるまで練習する。

ステップ3：テーブルに犬と車を置く。「ブーブー」と言って、プロンプトし、車に触らせる。次の試行からプロンプトフェーディング。プロンプトなしでも10試行中9試行以上、車に触れるようになるまで続ける。時々左右の位置も変える。

ステップ4：「ワンワン」と「ブーブー」を3試行くらいずつ、交互に練習する。切り替えが早くなってきたら、ランダムローテーションへ。「ワンワン」と「ブーブー」を交互ではなく、不規則（ランダム）に言い、10試行中9試行以上、プロンプトなしで正解できるようになるまで続ける。

最初の二つの弁別ができるようになったら、三つ目、四つ目の物の名前を慎重に増やしていく。最初のうちは、一つ教えるたびに、既存の物とランダムローテーション。

(3) 物の表出的命名

例えば、「ワンワン」と言えば、「ワンワン」とまねすることができ、しかも「ワンワン」と言えばいくつかの教材の中から犬が選べるようになったら、その両方を使って、今度は犬を指さして「これ何？」と聞き、「ワンワン」と答えさせることができる。

ステップ1：犬と車をテーブルに置いて、子どもに受容的命名の練習をさせる。

ステップ2：子どもに物を選ばせながら、同時に大人の言う物の名前をエコーするように促す。

ステップ3：子どもがエコーしながらその物を選んだ瞬間に、もう一度「これ何？」と聞き、「ブーブー」と言わせる。最初はこちらが「ブーブー」と言ってやってプロンプト。徐々にプロンプトを減らす。

2. 数の教え方

(1) 数唱

1～10までの数を、「いち、に、さん、よん、ご・・・きゅう、じゅう」とそらで言えること（数唱）。このとき、4は「し」ではなく「よん」と読ませた方がよい。7も「しち」ではなく「なな」と読ませる。たくさんの子どもが、「さんこ」はわかってもその次が「よんこ」だ、ということが分からない。「さん」の次は「し」だと思っているからである。

(2) 1つ～4つの個数を、パッと見で選ぶ

<受容言語としての「1こ」「2こ」>

テーブルの上に、二枚の厚紙を置き、一枚にはつみきを1こ、もう一枚には2こ、置いておく。子どもに「1こ」と言い、1この方を選ばせる。「2こ」と言ったら、2この方を選ばせる。このようにして、物の受容的命名と同じやり方で、「1こ」と「2こ」の区別を教える。

「1こ」と「2こ」が区別できるようになったら、同じようにして「3こ」を教える。

「4こ」まではこのようにして、パッと見で選ばせる。

<表出言語としての「1こ」「2こ」>

選べるようになったら、今度は「何個？」と聞いて答えられるようにする。

(3) 5こ以上の数を数える

5こ以上の個数は、パッと見ではなく、数えさせる。

例えばテーブルに、つみきを5つ横に並べ、「数えて」と指示を出す。

「いっこ、にこ・・・」と数えながら、つみきを横にではなく、手前（子ども側）に引かせる。

このとき、最後の数は二回言わせるようにする。たとえば

「1こ、2こ、3こ、4こ、5こ、6こ、6こ」

のように。これはあとで「何個？」と聞かれたとき、最後の数を答えさせやすくするため。

数え終わったら、「何個？」と聞く。もう一度、「5こ」と言わせる。

大人「かぞえて」子ども「1こ、2こ、3こ、4こ、5こ、5こ」

大人「何個？」子ども「5こ」

同じようにして、10までの個数を数えられるようにする。1～4までの個数も数えることを教える。

<数唱と手の動きを一致させる>

数唱と、つみきを数える手の動きがずれてしまう子がたくさんいる。解決策として、つみきを手前に引く子どもの手を軽く押さえて、子どもに数唱を促し、子どもが数唱したら手を離すようにする。

(4) 「〇こちょうだい」

「3こちょうだい」などの指示に答えて、指定した数だけ渡せるようにする。

<教え方>

つみきを横に8つほど並べる。「3こちょうだい」と指示を出し、ただちにプロンプトして、「いっこ、

にこ、さんこ」と数えながら、手前に引かせる。最後の数は二回言わせる。

「いっこ、にこ、さんこ、さんこ」のように。最後の数を二回言うことで、それ以上、数え進まずに止まることができる。

「さんこ」で止まれたら、「ちょうだい」と言いながら手を出し、子どもに手前に引いたつみきを全部手ですくって（1つずつ数えながらではなく一度に）渡すことを促す。

（5）数の概念の般化

<数える>

いろんな物の数を数えさせる。例えばお菓子の数、花の数、絵に書いてあるりんごの数。

<〇を〇ちょうだい>

例えばいろんな色のおはじきを用意して、「赤を3ちょうだい」と指示を出す。指定された色のおはじきを3つ渡させる。

<回数>

「3回たたいて」「2回ジャンプ」「3回まわって」などの回数の指示に答えさせる。また「何回たたいた？」という質問に答えさせる。

<数の呼称>

〇本、〇枚、〇個、〇人・・・といった、いろんな数の呼称を教える。

教え方は、まず鉛筆を三本、お皿を三枚、つみきを三個、テーブルの上にそれぞれ固めておいて置く。

「三本」と言って、鉛筆を触らせる。「三枚」と言ってお皿を触らせる。「三個」と言ってつみきを触らせる。このランダムローテーションをする。慣れたら、「鉛筆は？」と聞いて「三本」、「お皿は？」「三枚」と言わせる。鉛筆をおはしに替え、お皿を厚紙に、つみきをボールに替えて同じ訓練をする。二本、二枚、二個でも同じ訓練をする。

そうやって、長細いもの＝本、平たいもの＝枚、かたまり＝個、という対応関係を、感覚的に理解させる。

その上で、それぞれについて、「1本（枚、個）、2本、3本、4本・・・10本」と1～10までの言い方を教える。

ひと＝人、動物＝匹、乗り物＝台、などについても同じように教える。

（6）数字の読み

1～10までの数字の読みを教える。また5才頃になったら、数字を書くことも教えよう。

（7）個数と数字の一致

<教え方>

子どもの前に、つみきをいくつか置いておく。次に適当な数字カード、例えば3をテーブルの中央に置く。「これは？」と聞いて「さん」と読ませた後、「じゃ、3ちょうだい」という。子どもにつみきを三つ選ばせ、数字カードの手前に置かせる。

同じようにして、数字を見せて、その数だけ、つみきやおはじきを選ぶ練習をさせる。その逆の練習も。

3. 社会性の構築

(1) 社会性構築のポイント

- ・基礎としてのコンプライアンス（かんしゃくを起こさず、すなおに指示に従える）
- ・一次性強化子と社会的な刺激との対提示
笑顔で目を合わせながら子どもの好きなお菓子を与えると、子どもは（ ）が好きになる

- ・喜怒哀楽をはっきり示す

「ほめるときには蜜のようにやさしく、怒るときは地獄の炎のように」

- ・喜怒哀楽に結果を伴わせる

お母さんがよろこぶといいことがある。お母さんが怒ると悪いことが起る

↓

お母さんが喜ぶとぼくもうれしい。お母さんが怒るとぼくは困る

- ・決め手は「ABA 的関わりのシャワーを浴びる時間×先天的な社会性の障害の度合い」？

- ・健常児との交わりの必要性

ただ集団の中に入れるだけではダメ。しかしある時点が来たら決定的に重要に
まずは後追いと模倣から

(2) 自発模倣

自発的な模倣の重要性

<教え方>

動作模倣が上手になってきたら、「こうして」の指示をなくし、無言で動作だけをする。模倣したら強化する。

強化子も徐々に間引いていく。

手遊び歌やダンスなど、楽しい動作模倣の機会を多くし、模倣の自発が見られたら、思い切り強化する。

(3) 目合わせ

指示のときより、正解して強化するときにアイコンタクトを取るように心がける

<「こっち見て」ではなく、自発的な目合わせを促す方法>

向かい合ってすわり、目が合うまで待つ。目が合ったら強化。2 分間で何度目が合うかを記録してみ
て、目が合う回数の増加を目指す。最初は正面で。次は斜めや横にすわっても目が合うように。

(4) 人を好きにさせる

自己刺激より適切なおもちゃ遊び。一人遊びより関わり遊びに従事させる。ただ従事させるだけでなく、ふんだんに強化を伴わせる

近所の子どもを招き、一緒に過ごす時間を設けて、そこに強化子（おやつなど）を集中させる

(5) 関わり遊び

①遊びの動作を模倣させる。遊びに関する指示に従わせる（遊びにおけるコンプライアンス）

抵抗しても強引にリードする。かんしゃくを起こしたら、無視して消去。

従えたら強化。テンションを高くし、一人遊びよりも楽しい時間に。

上手になったら、子どもに少し自由を与え、リードしたり、されたりを繰り返す

②遊びながら、興味や喜びを共有する。

うれしいときに目を合わせ、にっこり笑い、声をかける

③遊びにおける「やり返し」を教える

例：車をぶつけたら、ぶつけ返すことを求める

お料理を子どもに「どうぞ」したら、子どもにも「どうぞ」し返すことを求める

タッチして逃げ、追いかせさせる→追いかけてっこ

ヒーローごっこで、切られたら切り返す。撃たれたら撃ち返す

④遊びにおける想像の共有（ごっこ遊び）

例：「これは電車だよ」と言っつみきを渡し、しばらくつみきを電車に見立てて二人で遊ぶ

「ここはおうちだよ」と言っつ、エリアを決め、お家ごっこをする

ごっこあそびにおいて決められた役割を演じさせる

⑤勝ち負けのある遊び

早い者勝ち

すごろく

じゃんけん

(6) 他者視点の取得

「相手の立場に立つ」「相手の身になって考える」ことを教える

その前提として、まず「相手に何が見えるか」を推測させる

<教え方>

ステップ1：見える／見えない

子どもと自分との間に下敷きを立て、自分の側に、例えばキリンのフィギュアを隠す。最初は頭だけ見せて、「見える？」と聞き、「見える」と言わせる。「どこ？」と聞いて、見えるところ、つまり頭を触らせる。次ぎに足だけ出し、「見える？」と聞いて、「見える」と答えたら、「どこ？」と聞いて、足に触らせる。

次ぎにキリンの全身を隠して、「見える？」と聞き、今度は「見えない」と言わせる。

この方法で、「見える」という言葉の意味を教える。

ステップ2：「ママに見える？」

子どもに見える物とお母さんに見える物とは違う、ことを理解させる。

子どもとお母さんの間に下敷きを立て、子どもの側にキリン、お母さんの側に車を置く。子どもが「何が見える？」と聞いて「キリン」と答えさせる。次に「お母さんに何が見える？」と聞き、「ブーブー」と答えさせる。最初はすぐにお母さんの側まで来させて、お母さんに何が見えるのかを自分の目で確かめさせる。

(7) ソーシャルスキル・トレーニング (SST)

年長児や高機能児向け

- ・人との付き合いに必要な様々なスキルが具体的にどの部分で足りないのかを観察し、課題を決める
例：相手にお構いなく、自分のことを一方的に話してしまう

- ・いまからやることを子どもに説明する
↓
- ・正しい行動のモデルを示す (モデリング)
↓
- ・子どもにやってみさせる (リハーサル)
↓
- ・よいところをほめ、修正すべき点を指摘する (フィードバック)
↓
- ・現実場面に応用させる
その場に誰かがいられれば、その場で強化
さもなければ自分で自己評価させる (セルフ・モニタリング)